

天の軍勢の賛美

「栄光が、いと高きところに、神に、地の上に、平安が、み心にかなう人々に」ルカ2:14
“Doxa en hypsistois Theo kai epi ges eirene en anthropois eudokias”

クリスマスに歌われる「荒野の果てに」という賛美歌があります。終わりの部分で繰り返される「グローリア イン エクセルシス デオ Gloria in excelsis Deo」は、印象深い句であり、この部分を高らかに歌うと、クリスマスがきた、という感が深まります。これは、ルカ2:14の前の句、「栄光が、いと高きところに、神に」のラテン語訳です。この聖句の前の句だけが歌われて、なぜ後の句が歌われないのか、ということを感じる場合があります。後の句はラテン語では「et in terra pax hominibus bonae voluntatis」と読みやすく、さらに前句が4語、後句が7語と、対になりにくいからかもしれません。冒頭のローマ文字に変換した原文のギリシア語も事情は同じです。

「栄光が、いと高きところに、神に、地の上に、平安が、み心にかなう人々に」と賛美した天の軍勢のメッセージは、何であったのでしょうか？天は神の栄光に、地には善人に平安に満ちて欲しいという願望、あるいは、祈り、なのでしょくか？ また主がお生まれになったので、神の栄光が地上に人の平和として実現するという預言なのでしょくか？

本日のクリスマスの日に、ルカ福音書にあるクリスマスの羊飼いたちの物語を、時間と空間を取り除いて不変の意味を求めながら、天の軍勢の賛美のメッセージを解き明かしてみましょく。

「さて、この同じ土地に、羊飼いたちが、野に宿りながら、夜、自分の群れを見守っていた。すると、主の使いが、彼らのそばに立ち、主の栄光が彼らの回りを照らし、彼らは大きな恐れで、恐れた。」(2:8,9) イエス様のお生まれになったベツレヘムの地の周辺にいた羊飼いに、天使が現れます。自分の周りが不思議な光に満たされて羊飼いたちは、大いに恐れます。

「導き教える者は「羊飼いに」と呼ばれ、導かれ、教わる者は「群れ」と呼ばれます。仁愛の善に導かず、教えない者は、真の羊飼いにではなく、善に導かれず、何が善かを学ばない者は群れに属するとはいいません。」(天界の秘義 343)

この教え導く者が、夜という暗く何もわからないながら、荒野という不毛の日々の中にいながら、自分に教わり、導かれようとする者たちを見守っています。主の啓示がない中で、正しい生活をしようとする者たちの姿が、この夜の荒野で羊を見守る羊飼いたちの姿で描かれています。

そのとき、忽然と天使が現れ、自分達の回りに光、「栄光」があふれます。突然のあまりの出来事に羊飼いたちは、おびえます。

この「栄光」「グローリア」の意味は、

「「栄光」とは、最も高い意味では、神の真理の面での主のことです。そのため主から出て進むのが神の真理です。しかし、表象的な意味で「栄光」は隣人に対する愛の善、あるいは仁愛です。これは主の天

的王国の外部の善であり、主の霊的王国の内部の善です。というのはこの善が天界での神的真理であるからです。・・・この霊的天界は「栄光」と呼ばれています。なぜならそこにあるものは、光と明るさと光輝の内に見えるからです。」

(天界の秘義 5922 (3))

私たち新教会の人間は、イエスという人が生まれただけではなく、永遠・無限の神エホバが、この瞬間、全宇宙のこの地点に人となり、お生まれになったことを知っています。この神的真理を深く考えれば考えるほど、深い深淵を覗きこんでいるような恐れがわいてきます。

すべてを創造した無限・永遠・全能の神が、地上に降臨され、人として生まれる。私たちが知る限り、この宇宙は138億年前に誕生し、存在し続けてきて膨張を続け、半径は450億光年に膨らんでいます。この宇宙を創造し、絶えず維持されている神様が、ほんの2千年前に、この地球のイスラエルという土地に、人としてお生まれになる。ある意味、人の想像を絶した恐れのようなものがわいてきます。夜空に天から星が降ってくるような畏怖、何万メートルもある海底を覗くような恐れがわいてきます。

永遠の神が、人としてお生まれになったというのは、神的真理であり、「主は、天を押し曲げて降りて来られた」(Ⅱサム 22:10)ました。また、人は自分自身では生命を持たない、これも神的真理です。この神的真理、栄光は、まず人を畏怖させます。

それは「隣人に対する愛の善、あるいは仁愛」についても同じかもしれません。

それまで暗闇の中で、それぞれが利己的で当然という、厳しい競争世界にばかりいて、突然、無償の愛に接すると、逆に恐れます。自分と全く異なる価値観に接すると、自分の価値観が全く役に立たなくなるので、自分の価値観が崩壊してしまうという恐れがやってきます。

すると天使は、言います「恐れるな。みなさい、私はまことに、あなたがたに大きな喜びとなる善い知らせをもたらすに来ました、それはこの民すべてにとって、喜びとなるでしょう。」

まず羊飼達にとって大きな喜びとなる知らせです。そして、その民、群れにとっても、喜びとなるとされています。その知らせは、

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」

ダビデの町、ベツレヘムは、天的なものが霊的なところで迎える新しい状態です(天界の秘義 4594)。天的な愛が、霊的な真理の中に新しい状態で出現したと、おぼろげに理解できます。これが私たちを救う方、救世主が誕生したという宣言です。しかし、私たちや羊飼達には、それが何であるか、「しるし」がなければ判別できません。愛が霊的状态の中に表れ、私たちを救うといっても、なにかよりどころとなってそれを見いだす「しるし」が必要です。

私たちのための「しるし」は、「産布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりご」であり、

「飼い葉桶とはみことばからくる真理の教義を意味します、なぜなら馬はみことばの理解を意味するからです。そして飼い葉桶は馬を養うからです。・・・産布とは、最初の真理、無垢の真理であり、さらにまた神的愛の真理です。」(黙示録解説 706[12])

神様は私たちを愛しておられます。宇宙創造のはるか450億光年の向こうから、この地球に来られて、肉体をまとわれ、そしてその自分の肉体の生命をなげうってまで私たちすべてを救おうとされています。聖書、みことばから得た正しい教義は、この比類のない、信じがたい愛を説いており、みことばの中から、**知力を尽くして、この愛を見いだすこと**、これが私たちに与えられ、私たちすべてが探し求め、見つけなければならない「しるし」です。

この「しるし」なし、神的な愛なしには、ただ神的真理へのおそれがあるだけです。

永遠からの存在である神が、肉体をまとわれ、地獄と戦われて征服することによって、秩序を回復して、私たちが救われる道を切り拓かれ、今も絶えず導いておられる。

人自身は生命を持たないが、生命を受ける器であり、その生き様によって、天界の生命を受けて永遠に幸福の状態で生きることができる。みことばから、このような教義を見出し、生きる指針とすることができれば、いかに励まされることでしょうか。

クリスマス物語のすべて、私たちにとって、本当のクリスマスは、ただのお祭りごと、ツリーを飾り、ごちそうを食べ、贈り物を交換するだけではなく、主の神的な愛、無垢の真理をみことばから撰られた教義の中に発見、あるいは再発見することです。

どうすれば、私たちはそれを発見することができるのでしょうか？

みことばと著作をただ読めばいいのでしょうか？

神的な真理そのものである福音書には、こう続けられています。

「すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。『いと高き所に、栄光が、神に。地の上に、平和が、御心にかなう人々に。』」

「その軍勢または天の軍勢は真理を意味します。それは「軍」は真理を意味し、王国の子たち、天使たちは彼らの持つ真理によって、天の軍隊と呼ばれるからです・・・」(天界の秘義 3448-5)

真理が顕現します。主の前にへりくだれ、主を賛美せよ、それが、高らかに宣言されます。

『神を賛美する』とは告白と崇拝を意味し、それは主にあっては賛美され、たたえられることをご自身の愛からではなく、ただ主の人への愛からのみ望まれておられるからです。」

主を賛美することが、人には必要です。これがなければ、神的な真理を受け入れることができず、平安を得ることもできません。

「自分自身の中にことごとく善がなく、自らは何もできないことを心から認め、他方、すべての善は神からきて、主がすべてをなされると認めます。人がこの認識のもとに、自己愛に属する自分の部分を退け、心すべてを開き、神的なものが善と力を持って流れ入ることができるように明け渡します。人がなぜ主の前に自らを低くしなければならぬか、また自分を低くすることは、自己を認め、主を認めるこ

と以外になく、それに応じて受け入れることができる理由です。」(黙示録解説 1210)

『ハレルヤ』、主ヤハヴェ（エホバ）を讃えよ！自らを低くすれば低くするほど、神的真理が自分の内に入ってきます。自分を低くしなければ、頭理解だけで終わってしまいます。

賛美によって、「栄光が、いと高きところ、神に。地の上に、平和が、み心にかなう人々に」。この句は、前の天軍の賛美と共に解釈することで、より大きく意義を持ってきます。自らを低くして、主を賛美することによって、天界に神的真理の光と輝きが増し、その神的真理を受け入れた人に、主との結びつきが生まれ、世の平和とは異なる、真の平安が訪れます。

この栄光は、それまでよりも深い、大きな栄光です。主は以前も人間であられましたが、自然的な部分だけは、潜在的なものでした。地球への誕生によって、目に見える神として人の間にお生まれになり、人としてどのように生きるべきかを示されたからです。

自然界での人間性の取得そしてその栄化により、主の栄光は以前に増して、輝くこととなります。

「この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。」(ハガイ 2:9)とみことばに言われている通りです。

ルカ福音書にも同じ表現があります。

「弟子たちの群れはみな、喜んで大声に神を賛美し始め、こう言った。『祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に。』」(19:37,38) 天使の軍勢とほぼ同じ表現です。

「これらのことは、主がエルサレムに行ったときに弟子たちによって言われました。そこで主は、最後の試練である十字架の苦難によって、その人間を神的なものに完全に結合し、同時に地獄をも服従させます；そして神的善と真理のすべては、その時、主から発するようになります。彼らは『主の御名によって来られる王は祝福されている。』といいますが、これは承認であり、栄化であり、感謝です。そして、これらすべてが主から来ています。(340 参照)

『天に平安、いと高きところに栄光』とは、『平安』によって意味されるものは、神的なものそれ自身と神的人間が結合し、そのため天使と人間が、主に結びついて平安を得ることをいいます。というのはその時、主によって地獄は屈服し、天界に平安が樹立され、そこに入る者たちは主から神的真理を持つため、『いと高きところに栄光』があるとされます。」(黙示録解説365-11)

『平安』のみことばでの内的意味は、主と天界、永遠の生、そして特に、主との結びつきによって天界の喜びがわき上がることです(〃)。

この平安は、世界平和という次元のものではありません。また、自分の人生は幸せだったな～という老齢での回顧でもありません。心の奥底、存在の奥底からわき上がり、染み出る静謐と安心感です。

「世の平安は、世での成功からきており、世との結びつきから来ています。そのためこれはただの外間だけで、主と天界はその中になく、世の生命とともに滅び、平安でないものになってしまう。そのため主はおっしゃいます『私があなたに与える平安は、世があなたに与えるものとは違う。』」(黙示録

解説 365 [6]

賛美と栄光と平安、これらは一体のものです。自己の卑下によって栄光が増し、平安が訪れます。私たちもこの善い知らせを、早速自分のものにしましょう。賛美と卑下によって、そして同胞に伝えにゆきましょう。本当のクリスマスの意義を。

「そして急いで行って、・・・飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てて、・・・神をあげ、賛美しながら帰って行った。」アーメン。

【第一朗読】 ハガイ 2:9 この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう。万軍の主は仰せられる。わたしはまた、この所に平和を与える。——万軍の主の御告げ。——」

【第二朗読】 ルカ2:6-20

ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。

すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。

御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。

きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」

すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」

御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」

そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。

それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。

それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。

しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

【第三朗読】 黙示録解説 1210

言った、神を賛美せよ、その僕たちよ、とは真理にいる者による主の礼拝を意味しています。これは「神を賛美する」が、主を告白し礼拝するという意味から、また「神の僕」が、主から真理にいる者であるという意味から明らかです(6, 409 参考)。

み言葉の多くの箇所、「神を賛美せよ」という表現は、主を心と口によって告白することを意味し、すなわち崇拝します。「神を賛美する」は「ハレルヤ」と同じ意味を持っています。というのは、「ハレルヤ」は「汝の神を賛美せよ」を意味し、そしてこれは、先に述べたように、神を告白し、崇拝するときの喜びと歓喜の声を意味します。「神を賛美する」とは告白と崇拝を意味し、それは主にあっては賛美され、たたえられることをご自身の愛からではなく、ただ主の人への愛からのみ望まれておられるからです。というのは、人は主を賛美したたえることが、必要であるからです、すなわち自分自身の中にことごとく善がなく、自らは何もできないことを心から認め、他方、すべての善は神からきて、主がすべて

をなされると認めます。人がこの認識のもとに、自己愛に属する自分のプロプリウム（自分自身のもの）を退け、心のすべてを開き、神的なものが善と力を持って流れ入ることができるように明け渡します。人がなぜ主の前に自らを低くしなければならないか、また自分を低くすることは、自己を認め、主を認めること以外になく、それに応じて受け入れることができる理由です。「神を賞賛する」「神を賛美する」は、主を告白し、心からの告白によって主を崇拝することは、以下のみ言葉に多くから明らかです(マタイ 21:16; ルカ 2:13-14, 20; 5:25-26; 7:16; 13:13; 18:43; 19:28-40; 24:52-53; 詩編 148:1-5, 7, 13; 他)。